



Title	先住民族遺骨問題の解決をめざして：令和2年度～6年度 文部科学省基盤研究A 成果報告
Author(s)	太田，好信；瀬口，典子；辻，康夫 他
Description	令和2年度～6年度 文部科学省基盤研究A（課題番号：20H00048）「先住民族研究形成に向けた人類学と批判的社会運動を連携する理論の構築」成果報告
Issue Date	2025-03
DOI	https://doi.org/10.14943/114018
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95098
Type	research report
File Information	Ota_report_kakenR2-6.pdf



用語集

日本人
日本国籍を持つ者。主に琉球、日本（ヤマト／大和民族／和人）、アイヌの3つの民族から構成され、アジア、アフリカ、ヨーロッパなどから移住する人々の増加を受けて、多様化が進んでいる。日本を「一国家一言語一民族」の国と想像する人々もいるが、琉球諸語・日本語・アイヌ語は相互に意思疎通が不能なほど異なり、アイデンティティも異なっている。アイヌは2019年の「アイヌ施策推進法」によって先住民族としての地位が確認された。琉球民族について、松島は「1879年以前の琉球国に生きていた琉球人にルーツを持つ人」と定義する。国連から琉球を先住民族と位置付けるよう数度の勧告がなされているほか、2023年の大阪高裁判決でも「琉球民族が先住民族であること」、「日本帝国による琉球の植民地支配の歴史」について事実認定がなされた。

植民地主義
ある民族／国家が、暴力によって他の民族／国家とその土地を支配（植民地化）しながら越境的に政治経済活動領域を拡張しようとする。遠隔地にある本国が天然資源や労働力を搾取するプランテーション的な植民地に対し、北海道のように入植者を送り込み新しい社会を建設する形態を入植植民地・移住植民地と呼ぶ。

アイヌ文化期
北海道島の考古学文化として設定された文化段階。それまで続いた土器製作伝統や竪穴式住居の使用が見られなくなり、鉄鍋や漆器などの使用、平地式住居へと生活様式が変化することを特徴としている。北海道島の縄文文化や擦文文化などと同様にアイヌ民族の祖先が形成してきた歴史文化の一つである。よってアイヌ文化期が成立する13世紀頃にアイヌ民族の祖先が北海道島外から移住してきたわけではないが、アイヌの先住性を否定する論に悪用されることもあるため、呼称の見直しも議論されている。

全ゲノム
「核ゲノム情報」と「ミトゲノム情報（mtDNAのゲノム情報）」をあわせたものを「全ゲノム情報」と呼ぶ。DNAとはゲノム情報を記録する物質の名称。近年、アイヌの先住性を否定する文脈で「アイヌの全ゲノム解析により、先住民ではないことがわかっている」などと断定する主張がされているが、これは研究者から見れば明白な虚偽である。日本列島内の集団構造に特化しておこなわれた縄文文化期の人骨ゲノム解析の論文はいまだ出版されておらず、北海道アイヌの全ゲノム解析は行われていない。また遺伝情報のみを持って過去の民族集団（アイデンティティの異同）を論じることはいできない。

先住民族遺骨問題の解決をめざして

令和2年度～6年度 文部科学省基盤研究A 成果報告

令和2年度～6年度 文部科学省基盤研究A（20H00048）
先住民族研究形成に向けた人類学と批判的社会運動を連携する理論の構築
<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-20H00048/>
2025年3月発行
研究代表者：太田 好信（九州大学）
研究分担者：瀬口 典子（九州大学）、辻 康夫（北海道大学）、松島 泰勝（龍谷大学）、池田 光穂（大阪大学）
富山 一郎（同志社大学）、加藤 博文（北海道大学）、北原 モコットウナシ（北海道大学）

目次

- 琉球人「遺骨問題」とは何ですか？（p.3）
- なぜ、先住民族の遺骨が収集されたのですか？（p.3, p.4, p.5, p.6）
- 「日本人起源論」とは何ですか？日本人は固有の「人種」ですか？（p.5）
- 「遺骨問題」の解決はなぜ重要なのですか？（p.4, p.9, p.10）
- DNA 分析が先住民族性を証明すると聞きましたが、本当ですか？（p.6）
- 「遺骨問題」の解決にむけ、世界ではどのような動きがありますか？（p.4, p.10）
- 「縄文文化」や「擦文文化」をつくったのは誰ですか？（p.7）
- 「尊厳ある慰霊」とは、どういう意味ですか？（p.8）

はじめに

マスメディアでいう「遺骨問題」は、研究のために持ち出された先祖の遺骨をあるべき場所に戻してほしいと願う子孫やコミュニティを形成する人たち（たとえば、樺太アイヌ、北海道アイヌや琉球民族）と遺骨を継続保管し今後の研究に利用したいという学界の一部との対立からうまれました。

多くの北海道アイヌ民族の遺骨は、返還が決まるまでの間、北海道白老町にあるウポポイ慰霊施設に、樺太アイヌの遺骨は北海道大学アイヌ納骨堂などに保管されています。また、裁判において争われた琉球民族の遺骨も、京都大学総合博物館に試料として収蔵されたままです。いずれも、遺骨が安住できる場所とはいえません。「遺骨問題」は、わたしたち社会の構成員が、遺骨研究の形成された世界史上の負の遺産にどう向き合うか、という課題を考える窓口になります。

これは、2020年度から2024年度までおこなった文部科学省基盤研究Aの研究成果の一部を広く社会において共有する目的で作成されたパンフレットです。この研究は、さまざまな専門的情報を駆使し、柔軟に辛抱強く思考し、困難ではあっても解決にむけた交渉と実践に連動させるという、知のなかに社会を取り込むことを目指してきました。なかでも、「遺骨問題」について、いま、わたしたち研究者がどのように考えているのかを示す内容です。全員が遺骨はあるべき場所に戻し、先住民族のくびとともに弔い、人間性を回復したいという希望を共有しています。

研究代表者 太田 好信



2023年7月9日に、私たちが那覇市で行ったシンポジウムの記録（『アイヌ・先住民研究』第4号所収）も、こちらのQRコードから読むことができます。

盗骨によって切断された先祖と子孫との霊的絆の糸を遺骨返還によって結び直したい



松島 泰勝
龍谷大学経済学部教授 島嶼経済論 琉球民族

取り戻そう！
私たち琉球の先祖の骨神を

琉球人遺骨問題とは何か？

琉球王国は、1879年に日本政府により侵略、併合され、日本の植民地になりました。1929年に京都帝国大学の金関丈夫助教授は、指導教授の命令と研究補助金、そして大和民族植民者からの了解と協力を得て、琉球各地から琉球民族の遺骨を盗みました。2017年初頭、私は百按司墓（沖縄島今帰仁村内にある第一尚氏の王族、貴族の墓）から金関が盗骨した遺骨が京大に隠匿されていることをしりました。京大に遺骨に関する質問をし、その「実見」を求めましたが、「個別の問い合わせには応じない」として却下されました。このような民族差別に対し声を上げないと「琉球差別」が固定化され则认为、2018年12月、京大を京都地裁に提訴しました。

遺骨研究の目的は、「日琉同祖論」の実証を通じて琉球領有を科学的に正当化することです。しかし琉球民族にとって遺骨は骨神であり、先祖と子孫を繋ぐ霊的絆です。遺骨返還訴訟は盗骨により切断された絆の糸を結び直しのための実践です。詳しくは『とう むどう わ ルーチュウーやふあーふじ ふにしん取戻さな！我した琉球先祖ぬ骨神』(下記のQRコード)をお読み下さい。

私は裁判を始める前にアイヌ民族の小川隆吉さん(写真右)から遺骨返還運動を学び、声をあげる勇気を得ることができました。ポッナモシィ(あの世)に行かれた小川さんに心より感謝申し上げます。



遺骨研究のどこが「不正義」なのですか？

亡くなった親族を尊厳をもって埋葬し、その霊を慰めることは、多くの文化において大切な営みです。このため多くの国は、遺体の損壊や、墓地の発掘を禁じています。ところが、先住民などのマイノリティに対しては、このような保護がしばしば否定されてきました。植民者に属す研究者たちは国家の支援のもと、先住民の抵抗を無視して墓地を発掘し、研究の資料としてきたのです。しかもこうした研究を通じてつくられた「人種理論」や「日本人起源論」などは(p.5参照)、先住民への偏見を社会に植えつけ、政府による差別的な政策を正当化しました。

他の国ではどうなんですか？

このような不正義の是正のために、「先住民族の権利に関する国連宣言」(2007年)は、遺骨の返還を求める先住民の権利を明示しました。またアメリカでは「アメリカ先住民墓地保護返還法」(1990年)により、博物館や研究機関の所蔵する先住民の遺骨の返還が進められてきました。他の多くの国もこれに続いています。

「正義」と「和解」には何が必要ですか？

「正義」とは不正義の影響を是正することであり、先住民が自己決定権を回復することが求められます。遺骨の管理権を取りもどし、埋葬や慰霊をおこなえること、遺骨研究のあり方を自ら決められることが重要です。「和解」は信頼関係の再建であり、そのために、研究機関、主流派の研究者、国家が、遺骨収集の経緯の調査、誠実な謝罪、賠償などを通じて、過去を修復する努力が必要です。

「先住民遺骨」の問題は、そんなに重要なんですか？



遺骨返還は正義と和解への一歩だと思います

辻 康夫
北海道大学 政治理論専攻 千葉県出身



池田 光穂
大阪大学名誉教授 専門は医療人類学ですが、中央アメリカの先住民が直面する政治的実践課題に長く取り組んできました コスモポリタン

日本人起源論は人種主義です

日本人起源論って何ですか？

「日本人起源論」は、今日では誤りとされる「人種」概念の産物です。提唱者の坪井正五郎（1863-1913）は、当時の定説であった人種論に基づいて、アイヌの祖先より先に日本に先住民がいたという、エドワード・モースの説を継承し、アイヌの祖先が先住民を北方へ駆逐したという人種交代説を唱えました。それを批判した小金井良精（1859-1944）はアイヌを日本人よりも「劣等」な石器時代の人だと主張し、北海道をその「人種の島」と主張しました。長谷部言人（1882-1969）もそれを引き継ぎ、日本人の直接の祖先は縄文人であり、アイヌと日本人は無関係であると主張しました。これらは文化的かつ法的な識別特徴である「日本人」集団を多様性のある連続体と考えず、日本人を固有の「人種」とみなした誤りに基づいています。日本人を民族集団がもつ遺伝的連続体としてその移動と生殖的混血現象から説明することをようやく可能にしたのは、埴原和郎（1927-2004）の二重構造モデル（1991）以降という比較的最近のことなのです。

日本人起源論といまの「わたしたちのルーツ探し」は無関係なのですか？

この場合、わたしたちは「日本人」と「わたしたち」の関係について冷静に区別する必要があると思います。まず、わたしたちの具体的な来歴を考えてください。親族の範囲を広げていくと（国籍や出生地を含めて）地理的にかなり遠方のルーツをもつ人がいることがわかります。ご先祖を単一にたどることも可能ですが、同時に婚姻を通して夥しい地域集団との親族交流があるはずです。他方、自分たちのルーツを「日本人」のひとつの例として考えてみても、血の繋がりをもたない同じ日本人の隣人も非常に異なる地域集団の混成からなりたつでしょう。その結果、典型的な日本人をみつけだすことは困難というよりも不可能なことに気づきます。

アイヌが先住民族であることは科学によって証明されるものなのですか？

近年、DNA 研究は人類の移動史や先祖のルーツを探るための強力な手段として注目されています。しかし、使い方を誤ると、先住民族を尊重しないまま研究を進めてしまう危険性があります。たとえば、「日本人のルーツ」を調べるためにアイヌや琉球の人々のデータを使うのは、彼らが固有の歴史や文化をもつ集団であることを軽視する行為です。また、「DNA で先住性が証明できる」という説明は誤りです。こうした誤った説明で研究に同意させるのは、先住民族を欺く行為です。

そもそも、民族とは遺伝的特徴だけではなく、社会・文化・歴史的経験の共有によって形づくられます。先住民族とは、植民地化や同化政策によって土地や資源を奪われ、文化や言語を否定されるなどの不正義を受けながらも、伝統とアイデンティティを守り続けてきた人々です。「いつから住んでいたのか」という時間の問題ではありません。

人類学の研究はどう変化していくのですか？

たとえば、今日の世界の人類学では、先住民やアフリカ系アメリカ人などの民族マイノリティから無断で遺骨を収集し、研究用や教育用の標本として扱ってきたことが、これらの人々の尊厳を長らく損なってきた事実として改めて認識されるようになりました。こうした植民地主義の負の遺産や人種差別の問題に対して、人類学の分野では、返還すべき遺骨は返還し、透明性の高い倫理基準を策定し、子孫のコミュニティと連携して協働研究を進め、できるかぎり遺骨を傷つけない方法を導入するなどの取り組みが行われています。



研究者は返還のプロセスによって歴史の重み、人間の尊厳を知る

瀬口 典子
九州大学 比較社会文化研究院 モン
タナ大学ミズーラ校 人類学部 生物
人類学 Ethnic Japanese



加藤 博文
北海道大学教授 先住民考古学
北海道出身

過去は誰のものですか？

人間の生活は、遺跡の形で大地に記録されます。神殿や洞窟などは目に見えてわかりやすい遺跡ですが、戦争の痕跡や人を埋葬した墓も遺跡の一部に含まれます。考古学者は、先人たちの生活の痕跡である遺跡や遺跡から出土する人々が製作し使用した道具などに基づいて歴史を復元します。

世界文化遺産を含めて世界各地の遺跡には、先住民族の祖先が残した遺跡が多く含まれます。これまで遺跡の評価は植民者に属す研究者が一方的に行い、そこに非研究者の先住民族が関与する機会はありませんでした。しかし**過去は研究者の所有物でも独占物でもありません**。先住民族の歴史は、先住民族が評価し、保存管理に参加して研究を担っていくべきです。

なぜ時代を区分するのですか？

考古学者は先人が残した建物や道具や埋葬形態に注目して、そこに時代的变化を見出し、歴史をいくつかの文化段階に区分してきました。歴史の流れを文化の変化で理解しようとしたのです。縄文文化や弥生文化などは、その代表的な例です。しかし文化の変化は、必ずしも文化の担い手の変化を意味しません。よって「縄文人」や「続縄文人」などの文化集団名がありますが、そのような固有の集団はおりません。北海道島では、「縄文文化」も「擦文文化」もアイヌ民族の祖先の文化として理解されています。

精神文化の尊重って何のこと？

たとえば、亡くなった家族を大切に思い、死後の平穏や故人の遺体・人格が大切にされるよう願うことも精神文化です。**死者を葬ったした人、葬られた人が望んでいた形を保つ（掘り出さない・持ち出さない・元に戻す）**ことは、精神文化を尊重する1つの基本的な在り方でしょう。

アイヌや琉球の遺骨は、研究機関に運び込まれ、後に研究対象とはならなくなりましたが、遺族や地域に返還されず、バラバラになったり放置されたりしていました。これは故人に対しても、遺族や地域に対してもたいへん失礼な取り扱いで、これにより今も傷ついている人がいます。

どうやって / いつまで慰霊するの？

遺骨の返還を求めるとき「慰霊をどのように / いつまですればいいのか」が気になる方もいるでしょう。アイヌ民族の場合は、遺体・遺骨を再埋葬したあとに墓地の手入れは必要ありません。慰霊を行うのは3～5代前の先祖までで、それより古い先祖には慰霊をしなくなります。大がかりな慰霊施設も、永続的な慰霊も必須ではありません。

遺骨の返還は遺骨を保管してきた側の責任で行うべきです。返還する側が、慰霊の実施など返還の条件を一方的に決め、遺族や地域に負担を強いることは不当です。



〔論文〕アイヌ民族の葬制・祖霊祭祀と遺骨の
「再埋葬・慰霊」：民族誌・文学による検討 (PDF)



北原 モコットウナシ
北海道大学教授 文化人類学 ア
イヌ民族



富山 一郎
同志社大学教授 歴史学・沖縄近
現代史 日本人

遺骨返還は未来を作り上げる運動

学者の権威？

がんらい知とは、知識の多さや情報量のことではありません。知の在り方を深く考えていた哲学者中井正一は、知や思想のことを「契機と契機の構造」と述べました（中井「農村の思想」1951年）。わかりにくい表現ですがそこには、多くの知識を占有することを権威と勘違い続ける研究者や大学にたいする、根源的な批判があります。すなわち知とは、誰かの占有物ではなく、様々な経験を持つ一人ひとりが主人公（契機）となって、ともに作り上げる営為なのです。

自分たちの歴史

たとえばそれは、自分たちの歴史にどう向き合うのかという問題です。歴史を知るとは、過去にかかわる知識量のことでなく、一人ひとりが自らの経験を、死者たちに重ね合わせ、過去の出来事に向き合う営みなのです。またそれは、過去に向き合いながら一人ひとりが主人公になって自分たちの未来を想像し、作り上げる運動だといえるでしょう。だからこそ遺骨をうやまい、死者をとむらうこととは、一人ひとりが歴史を担う主人公になることに他なりません。

破壊

研究を理由に墓を暴き遺骨を持ち去ることは、歴史にかかわるこうした人々の営みを、破壊することです。いまだに遺骨を占有し続ける京都大学に対してなされた琉球遺骨返還請求訴訟において大阪高裁は、遺骨を研究材料だと主張した日本人類学会に対し、「遺骨はモノではない」と断じました。学知の名において歴史を破壊するのではなく、未来を作り上げる運動として、知を確保しなければならんと思います。

責任とは何ですか？

罪責ということばがあるように、責任は、重苦しく、抑圧的なイメージをとまいません。けれども、世界には、先祖のケアは自らの責任であり、遺骨返還はその責任の一部だという先住民族もいます。また、責任ということばの語源を探れば、他者からの呼びかけに応えるという意味もあります。遺骨を保管してきた研究者は、先住民族からの遺骨返還の呼びかけに応える関係に置かれているのです。責任は、あたらしい関係性をつくりだす呼びかけにもなります。

過去との向き合いがなぜ大切なのですか？

先達の残した優れた仕事を相続するとは、負の遺産も同時に引き受けることをいいます。「遺骨問題」では、過去に何があったのかだけではなく、先祖の遺骨を持ち去られた被害者たちが語り継いできた経験、その経験と不可分な不満、不信や怒りに耳を傾け、それらに応答し、変革の糧にする必要があります。学術界は過去と向き合う責任を果たし、はじめて未来への道筋が開けるのです。

なぜ、そんなに過去にこだわるのですか？

トラウマということばがあるように、暴力は一過性の出来事ではありません。過去の暴力が現在に息づいている例が「遺骨問題」です。植民者に属す研究者は先達の行為が現在において暴力のアフターライフを形成していることを認め、それを是正する責任があります。



太田 好信
九州大学名誉教授 北海道大学・アイヌ先住民研究センター客員研究員
文化人類学 北海道入植者の子孫
(3世代目)

遺骨返還は誰もが人間に戻る道